

創学舎ニユース

No.260

いじめの周辺

(傷つきやすい心)

いじめた側は、いじめられた人のことをいつか忘れるだろう。いじめを遠巻きに眺めていた人達は、もっと早く忘れてしまっただろう。そして、いじめられた人だけが、傷つき、一方的に損をする。いじめられた側だけが、味わう不合理、不条理。

最初に書いたように、私もいじめにあつたし、学校に通えない日々も経験した。とにかく恐くて、学校に行きたくなって、前向きなことは何も考えられなかった。今思えば小学校一年生だから仕方ないことだったのだが…。幸いにも、母の努力と、担任の先生の頑張りのおかげで、また学校に通えるようになり、継続のないいじめは収まった。そして、私の中で、いじめより怖いものが生まれていった。脳の病気である。小学校時代に、三回意識を失い病院に運ばれた。頻りに襲う立ちくらみ。倒れないまでも「フワッ」と体が浮くような感覚は、毎日のように味わった。「死ぬのかな?」と心のどこかでいつも考えていた。殴られたり、小突かれたりするのとは、その瞬間だけの恐さだが、「死ぬのかな?」というゆるやかな恐さは、重くのしかかっていた。

妄想は、たくさんした。自分に手を出した奴、陰口をたたいた奴をぶちのめす。偉くなくて見返す。でも、我に帰ると空しかった。そういう自分を勇気づけてくれたのは、大人達だった。担任の先生が話してくれた「いじめられた経験」。保健室は、かつこの避難所で、養護の先生も「いじめられた人」だった。何と、母も「いじめられた人」であった。時には、涙ぐみながら、話してくれる物語は、私の共感をよんだ。大きくなれば、また別の世界があるんだ。こんな風になれるんだ。そう思えると慰められた。

Aさんという人がいる。骨が育たない病気で、体も小さく、すぐに骨折する。小さい時から、さげすまれ、いじめられる。骨折して、入院、手術して退院のくり返し。大人になって、結婚するも、破綻。自殺未遂も数知れず。そんなAさんが、渡米して学び、自分の存在意義を見出す。福祉の世界において、今はかせない人となった。講演・書籍を通して発信される彼女のメッセージは、多くの人を勇気づける。二十四時間体制で世話をしてくれる人を必要とするAさんの家には、大勢の若者が集まり、世話をしながら、実は生きるエネルギーをもらい若者自身も成長していく。

(小林)

トーチライト6

文章と体が呼応している。頭が、微熱が出たときのように、熱い。早く先を読みたいけ

れど、ページをめくってしまつのが本当に惜しくて、最後まで読んでしまいたくなくて、わざと、長い休憩をとってしまう。

こんな風に本を読んだことがある。大学二年生の頃だった。作家は須賀敦子という人だった。

須賀敦子は二十代の終わりから四十代の初めにかけてをイタリアで過ごし、帰国後六十代になってから作品を発表した。イタリア文学者としても上智大学で比較文学の講義を持った。最近では彼女を特集したテレビ番組や新聞記事も見られるようになったが、知名度はまだ高くない。処女作「ミラノ霧の風景」の読後に、この人に会いたい、と強く思ったのだが、その頃にはすでに亡くなっていた。母にも読んで、と勧めたのだが、はつきりとした感想は返ってこなかった。

人生を変えるような出来事であったが、出合いはほんの偶然だった。外国語に関するある人の本を読んでいたら、須賀敦子が紹介されていた。幸い大学の図書館にあった。

一人の作家から複数の作家へ。一冊の本から複数の本へ。枝は無数に、四方八方に分かれている。読書は、過去に生きた人々、遠く離れて暮らす人々との対話に他ならず、その先に広がる世界はなんと豊饒で、奥深いものか。須賀敦子が愛したナタリアギンズブルク。彼女の父の国語であった森鷗外。結婚五年目で逝った夫と共に言葉の世界を確かめ合ったイタリアの詩人、ウンベルトサバ。はたまたハンセン病患者に人生をささげた、神谷美

恵子の文章との類似性。読書の愉しみは、人と会うことに似ている。

自分だけの人生を求めて故国を離れた彼女は、イタリアに赴く前に、二年ほどフランスで文学の勉強をした。そこで、同じような想いを胸に抱いたドイツ人女性に出会ったことが、「ヴェネツィアの宿」と題された著作の中で語られている。彼女が須賀に対して、「人生がうっかりすぎてしまつようじゃなくなつたのよ」と言う場面があるが、解説で指摘されている通り、これは須賀敦子自身の想いが表現されたように思える。そして、読んだ日から、私はこの言葉と共に生きてきた。

他にも体の一部となつている言葉は多いけれど、最後に、須賀敦子が人生のいくつかの場面で、途方に暮れて立ち尽くした時に支えとなった、サン・テグジユペリの言葉を引用したい。

「建築成つた伽藍内の堂守や貸椅子係の職に就こうと考えるような人間は、すでにその瞬間から敗北者である。それに反して、何人にあれ、その胸中に建造すべき伽藍を抱いているものは、すでに勝利者なのである。」

(戦う操縦士 堀口大學訳)

(武内)

一所懸命?

一生懸命!

先日自分の物事に対するスタンスを考え



させる機会があった。テニスプレーヤーの松岡修造が』とにかく目の前のことに一所懸命になれ!』自分が世界にいかれたのはこれだ!』と母校の生徒に言っていた。(ちなみに彼は、目の前のこと、つまりひとつのことを懸命にやれという意味で一所懸命を使いたいと言っていた。)

彼の言葉は説得力がある。熱意がある。強さがある。私も塾講師としてその熱意、強さを持ちたいと思っているが、彼の言葉には負ける。彼にはそれだけ努力してきた、そして世界の一線で頑張ってきた経験がある。そこから生まれる言葉には、重みがある。

例えば、塾に通っている生徒諸君の立場で言えば、真面目は、授業に毎回きちんと参加して、宿題が出ればそれもやる。テストが近づけばテスト勉強を頑張り、部活は部活で毎日出る。これだつて大したことだとも思えるのだが、一生懸命は違う。授業にでたら、先生の話逃さず聴こうとする。宿題が出てそれをやるのだが、分からないところはなくそうと努力する。テスト勉強は目標を決め、それを突破するために計画を立て、頑張る。部活もレギュラーになることや、大会優勝を目標に時間外にも練習する。そういうことだつ。

つまり、与えられたことをこなすことで満足するのではなく、さらに上を目指し、努力する。自分からその行動を取っていく。そのよじなことを一生懸命というのだらう。もち

ろん、ひとつのことに一生懸命になっていれば、他のことができないこともある。

ほどほどにやるのもひとつの道である。それでも、勉強だつて運動だつてそこそこできるようになる。しかし、一生懸命にやっければ、自分の能力をもっと伸ばし、人生ももっとすばらしいものになるに違いない。それは松岡修造を見て感じる。彼の見ている世界はもっと広くて深い気がする。

だから、皆に伝えたい。真面目にやれ、そしてそれだけに満足せず、一生懸命やってみる。そうしたら、成績だつて伸びるし、志望校も現実になっていくだらう。(松永)

アドバイス

食事・風呂・トイレなどの雑事は、

勉強前にすませてしまえ

何か心にひっかかっているものがあると、今やらなければならぬ勉強になかなか集中できない。雑念はとかく人の心を乱すのである。あとは勉強以外にやることはないという状態にすることも集中力を高めるためには大切である。

自分の目標を紙に書いて毎日見よ

なんといいってもこれが一番。毎日それを見ていると潜在意識の中に入り込んでいく。そうしなければしめたもの。目標を決めるのだが、日常生活の中で気が付くとそれを忘れてしまうことは多い。そしてその一日一日、何もしていないでいて、「しまった」と思つても後のまつり。ぜひ目標を頭に叩き込んでほしい。以上、集中力を高めるための小さな工夫である。小さなことだけれども毎日続けてみるとそれまでとは違つてくると思つ。ぜひ試してほしい。

(長谷川)

受験勉強をなめるなよ

大学受験を目指す諸君、ついに夏休みがやってきた!現役で大学に合格しようとするなら、この夏休みは最高最大のチャンスである。とにかくこれほど長い時間、受験勉強に専念できるのは、夏休みだけなのだよ。頑張りなさい。頑張つて頑張つて、「こんなに勉強して、ウチの子は変にあつたのかしら?」と親が心配するぐらい頑張りなさい。

東大であろうが、京大であろうが、はたまた早慶上智だろうが、合格した人が、みんな頭が抜群にきれるという訳ではないのです。大半の人はそれこそ、鬼のように努力して合格を勝ちとつたのです。だから、自分に能力がないことを恐れる必要はありません。とにかくやるのです。やり続ければ、必ず道は開けます。但し、今まで、きちんと努力したり頭を使うことをさぼつてきた人は、そのツケをはらう所から始めなければならぬことだけは覚悟しておくこと。勉強という車を動かすための、エンジンからハンドルまで、いろんなものが錆びついていきます。ガソリンもなくなつていくかもしれない。車が動き出すための用意をすることにまず全力をあげなさい。

さて、この夏にやることは山ほどあります。具体的に述べていきますので、真剣にチェックしてみてください。

塾や予備校の講習も含めて、最低でも一日十時間以上は勉強すること。勿論、一週間に一回位は、完全にフリーな日を設けても構いません。「毎日ちよつとずつやる」というような過ごし方は、はっきりいってムダです。勉強には成果が出るまでに必要な料というものがあつて単純に勉強時間分の結果がいつもついてくるわけではないのです。例えば、全科目合計で毎日三時間やつたとします。本人は「少しはやっている。」というかもしれないが、成果は全くありません。この時間だつどの科目も部分的に眺めたことにしかならないからです。成果をあげるためには、どの科目も一通りやつて、さらにそれが体にしみこむ反復することが必要で、そう考えれば、一日十時間というのは妥当な数字といえるでしょう。

一学期のテキスト、指示された副教材、夏のテキストに絞り、とにかく、繰り返し。分からない所は調べる。それでもダメなら質問しろ。それでも分らなければ、丸ごと覚えこんでしまえ。(小林)

創学舎の本

受験生は読め!合格のキケツがここに

勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。

非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁 お父さんお母さんあなたの愛は

子供に届いていますか (著者 小林 憲右)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他全国書店で発売中。

卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。